

特集

卵巣癌の手術 up to date

企画者のことば

寺内文敏*¹ 岡本愛光*²

卵巣癌手術の目標は最大限の腫瘍減量 maximum debulkingを行うことである。進行卵巣癌症例の標準治療は、初回手術(PDS)を行った後に化学療法を行うことである。PDSに対して術前化学療法(NAC)後に interval debulking surgery(IDS)を行う NAC-IDSを比較した JCOG0602 試験の予後に関する結果も待たれるが、NAC-IDSはPDSに比較し、低侵襲的で完全手術完遂率が高く、ASCO、SGOのExpert Panelからも周術期高リスク症例や残存腫瘍径が1 cm未満にできないと予想される症例にはNAC-IDSが勧められている。

昨年開催されたアメリカ臨床腫瘍学会(ASCO)で、卵巣癌手術に関するインパクトの高い2つのトライアルの結果が発表された。1つ目は卵巣癌ⅡB-Ⅳ期の完全手術が可能と判断される症例に系統的リンパ節郭清を行うことで予後を改善することができるかというLION studyである。結果は多くの予想を覆し系統的リンパ節郭清は予後向上には寄与せず、周術期合併症を増やすためすべきではないという衝撃的なメッセージが発せられた。2つ目はプラチナ感受性再発卵巣癌に対して手術(SDS)を行ってから化学療法を行う群と手術は行わないで化学療法を行う群を比較するDESKTOPⅢ studyで、完全手術を行う

ことで予後を向上させることが証明された。これらのトライアルが論文化された時点で、今後は初回手術(PDS、IDS)と再発時の手術(SDS)をセットにして治療戦略を考えていく必要がある。

妊孕性温存における手術は、病理組織学的・臨床的条件を十分に考慮し、病巣の完全摘出や進行期の決定をできるだけ損なうことなく実行する必要があるが、現在わが国で上皮性卵巣癌の妊孕性温存治療の対象拡大のための非ランダム化検証的試験が行われている。欧米では遺伝性乳癌卵巣癌(hereditary breast and ovarian cancer; HBOC)患者に対しては、risk-reducing salpingo-oophorectomy(RRSO)を施行することが推奨されている。わが国でもRRSOの重要性が認識され、浸透していくと考えられる。

海外では腹腔鏡・ロボット手術が卵巣癌手術でも取り入れ始められており、また hyperthermic intraoperative intraperitoneal chemotherapy(HIPEC)も注目されている。以上のように卵巣癌手術がますます進化していくトレンドがあり、本企画では卵巣癌治療のエキスパートの先生方による最新情報を執筆していただいた。さらにはエキスパートの先生方でも遭遇する貴重な痛恨症例に関しても執筆していただいた。必ずや読者の皆様に役立つ企画と信じてやまない。

*¹F. Terauchi 東京医科大学(教授) *²A. Okamoto 東京慈恵会医科大学(教授)